

## 会員からの声④

# どこへ向かう試験研究

菊地 実

宗谷中部地区農業改良センター

## 1. はじめに

筆者は宗谷管内に勤務する酪農を専門とする普及員であり、酪農以外のことはよく知らない。振り返って見れば、多くの先生からご指導ご支援をいただき現在があると思える。たぶん筆者は、研究者諸氏の業績と人格の恩恵をもっとも受けている一人であろう。

酪農分野を研究される方の大部分は、研究能力が高く、学問的に価値ある業績をあげられている。

ところが、先進的な酪農家が拠り所とする知見の大半は、米国を中心に海外からもたらされたものである。科学は世界共通であり、情報ネットワークが世界を狭くしたことを考えれば当然の現象である。

しかし、道内で展開されている研究のトータルコストを考えれば、そうも言ってはいられないだろう。

なぜ、先進的な酪農家は海外情報に依存するのか。

そこが考えどころである。皮肉にも、道内の研究業績よりも米国のそれが現場ニーズにマッチしているのではなからうか？

## 2. 現場での再現性

工学は資源を使って無から価値を生み出す学問であり、生産現場での再現性が高い。これに対し畜産学は現に存在する家畜を研究し価値を生み出す学問である。ご承知のとおり、現場での再現性は必ずしも高くはない。換言すれば、農場における再現性の低さやバラツキを解決する研究が欠けているのではなからうか。

ここ数年の米国の酪農研究は、さらに裾野を広げ、特に管理学領域の進展が著しい。米国からもたらされた管理学の概念によって、農場における栄養学的の知見の再現性が高くなってきたことは事実である。

本稿を執筆するにあたり、筆者の尊敬する酪農家に試験研究に対する感想を尋ねた。彼の意見を要約すると次のとおりである。

- ① 農場で採用されている技術や概念の大半は海外からもたらされたものである。
- ② 雑誌等に掲載される技術情報でよく読むのは、海外の著名な研究者が書いたものである。

③ 普及員や雑誌等から入手する国内の情報は、すでに実践しているか、分かっている場合が多い。

④ 試験研究は酪農家とは別の世界で「学問」を研究しているのでは？

どうやら、試験研究に対して現場の酪農家は必ずしも高い評価と信頼を持っているとは言い難い（このことは、研究者個人を意味するものではない）。

酪農家のこれらの指摘は、研究組織と表裏一体である我々普及組織にとっても重要な示唆である。

## 3. 家族農業を支える

公的な試験研究や普及組織は、自前でR&D機能や教育機能を持たない家族農業をサポートするために存在する。とすれば、前述したように現場のニーズから乖離することは、組織として致命的なことである。

学問的な関心事や行政的な思惑が、現場のニーズと一致するとは限らない（無論、筆者は基礎研究の必要性を否定するものではない）。

現場のニーズは、現場に出なければ分からない。研究者諸氏よ、農場に出て農民の生の声を聞こうではないか！ 農場は研究素材の宝庫であり、農民は優れたパートナーであり助言者である。埋もれた可能性を農民と共に発掘しようではないか。

米国の酪農研究が優れているのは、アメリカンプラグマティズムに裏打ちされた研究姿勢にある。加えて述べるなら、米国の研究者は現場への普及に力を注ぎ、研究業績を通じて酪農産業にコミットし続けるという明確な姿勢がある。

そろそろ研究者の中から、現場に強いスター（スポークスマン）が登場してもいいのではなからうか！ スターの登場は、酪農家はもとより、研究者にも普及員にもいい刺激を与えると思うのだが！ 学会のステータスも重要であるが、現場のステータスもなかなか魅力的なものである。

筆者の記憶に間違いなければ、マクミーカン（NZのルアクラ酪農研究所の元所長）が次のような意味のことを述べている。「農場で役立たないことは、研究の価値がない。」